

十六日 ひょうえのさかん 兵衛志殿御返事 (定遺 1606)

かかるふしぎ候はず候に、去年こぞの十二月の卅日よりはらのけの候ひしが、春夏やむことなし。あきすぎて十月のころ大事になりて候ひしが、すこしく平癒つかまつりて候へども、ややもすればをこり候に、兄弟ににん二人のふたつの小袖、わた四十両をきて候が、なつのかたびらのやうにかかる候ぞ。ましてわたうすく、ただぬのものばかりのもの、をもひやらせ給へ。此二こふたつのこそでなくば、今年こんねんはここへしに候ひなん。其上うへ、兄弟と申し、右近尉うこんのじょうの事と申し、食じきもあいついて候。人はなき時は四十人し、ある時は六十人、いかにせき候へども、これにある人々のあに(兄)とて出来しゅったいし、舍弟とてさしいで、しきる候ひぬれば、かかはやさに、いかにとも申しへず。心にはしずかにあじちむすびて、小法師こほつしと我身ぼかり計御経よみまいらせんとこそ存ぞんじて候に、かかるわづらわしき事候はず。又としあけ候わば、いづくへもにげんと存じ候ぞ。かかるわづらわしき事候はず。又々申すべく候。なによりも多もんたゆうさくわんの大夫志ととのとの御事、ちちの御中おんなかと申し、上かみのをぼへと申し、面めんにあらずば申しつくしがたし。恐々謹言。

(弘安元年十一月二十九日)